

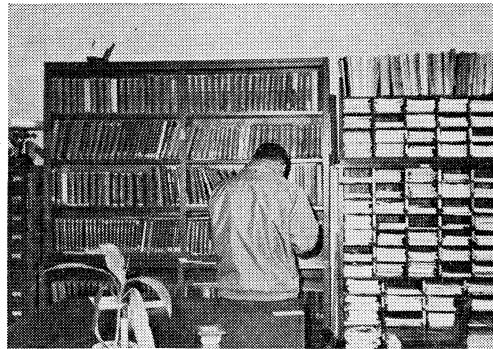


理学部・教室図書室 (1)

理学部は工学部と同じく特殊な状態に置かれている。それは理学部総合図書室がなく、9教室独自に図書室が存在し、それぞれに業務を行なっている点である。二、三の教室をのぞいては各1名の図書職員がいるが、実際図書職員として認められているのは理学部全体で1名だけであるにもかかわらず、休暇をとって司書講習を受けに行くことさえ困難な状態に置かれている。このように人員の不足は他学部と同じく深刻でその1名で、購入・受入・供用・複写・論文タイプと引き受けているような状態で、昨今いわれている近代化とは全く縁遠いように思われる。また書庫不足の悩みも各教室がかかえている問題である。

今回はこのような理学部の中での特徴的な数学教室と地鉱教室の図書室を紹介しよう。

数学教室 は歴史も古く明治30年の創設で、蔵書数も群をぬいて多く、現在約5万冊、年間購入費900万円以上、人員5名(教室事務と兼務)で、実験講座をもたず図書が生命の教室ですから整理の行き届いていることは理学部第一、靴を脱いでスリッパで書庫へ入るといっては大学広しといえどもこの教室だけではないでしょうか。2、3年前までは開架式でもなく、厳格な教官がデンと居られ、外部のものは利用しにくかったという風評もあったが、近頃は女性ばかりのなごやかな雰囲気、複写用には貸出しもできるようになり、利用者もグンと増加したようである。理学部を訪ねられ



地鉱教室 図書室

る時には是非一度数学教室の図書を閲覧されると参考になるでしょう。

地鉱教室 は大正11年の創設で、創設当時毎年3万円づつの図書を購入している記録があります。丁度ドイツの不況時代で本が安く買えたこともあります。1600年代ニュートンの論文の出ている Philosophical Transaction of the Royal Society of London もその頃に購入されたもので全くの貴重図書です。10円あれば親子4人充分に暮らしてゆけた時代の3万円はとにかく大した金額であつたらうと想像される。現在蔵書数約3万冊、年間予算160万~200万円、地質学の専門書を揃えている点では日本一といわれる下地が既に創設当時にあったものと思われる。文献複写の依頼も多く、本館の複写室に往復する本も年間100冊を下らない。

こども人手不足は多分に洩れずたった1人で日常の雑用に追われ、コンテンツサービスや毎日のように送られてくる外国からの別刷整理まではなかなか手が回らず、山積みされた本をみては頭の痛い状態である。

将来医学部のような総合図書館ができ、本館とは1本の線につながり、教室の図書業務が緩和されればいつも考えさせられる。

あとがき

新しく京大の門をくぐられた新入生諸君に心からお祝いの言葉をおくります。おめでとう！今日から図書館は諸君のものです。これからの4年間、図書館は諸君のよき勉学、研究、読書の場として自由存分に利用、活用して下さい。利用上わからないこと、希望、意見があれば気

軽に係員に申しでて下さい。私達はできる限り諸君の期待にそえるよう努力します。

本号は諸般の事情から発行が遅れ、卒業していかれた人達の手には渡らなかったことを申しわけなく思っています。次号以降編集スタッフも新たによりよきものと一同張りきっています。ご期待下さい。